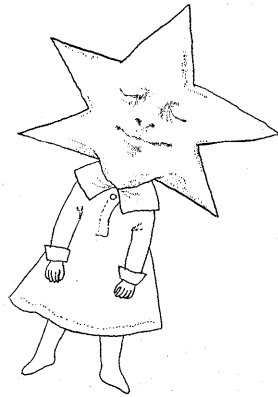


# 小さなものへの視線

森下 みさ子



どうも私は、人が気にとめないような小さな部分にこだわるところがあるらしい。

「こだわる」という熱っぽいテーマにもかかわらず、私の場合は、こんな頼りない言い方から始めるしかない。というのも、いつ何時、「こだわり」にひっかかってしまうか、本人にもわからないからである。それどころか、ひっかかったという自覚さえ持てないでいる。せっかくのテーマなのだから、「私は○○にこだわっています」とか「私は○○についてはウルサイ」とか主張できたら、どんなにかっこいいだろうと思うのだが、私にはこの○○にあたるものが実はない。ないというより、出会うまで、へたをすると出会ってもわからないまま、我れ知らず引きずり込まれているのである。

「こだわる」のは、私の場合、研究資料の領域でのことである。資料を読んでいて、説明のために付け加えられたような絵や図に、ふとした拍子に目がとまり気になりはじめる、もうイケナイ。いつのまにか協役の絵や図の方が前面に広がっている。「ふと」を誘い出すのはヴィジュアルなものが多い。網膜を通じてダイレクトに感覚に刺さってくるからだろうか。「どうしてこんな風に描かれたんだろう?」「なんでこの時代にこんなものがあるの?」と、考え始めたらしきがない。本題そっちのけで、絵をつぶさに眺めてはあれこれ想像をめぐらし、あげくのはてに単なる思い込みのあてずっぽうで気になる周辺をウロウロと調べ始めたりする。調べてみると不思議なもので、無関係に分類され配列されていた研究や資料が、私の中では勝手にうごめて連なり結ばれて、細い地下茎を張り巡らしはじめる。いきどまりのことも多いけれど、うまいぐあいに地下茎をたどって、それまでは見えなかった歴史の地層が見えてくることもある。そこに埋もれていた女性や子どもたちの声、連なって聞こえてくることもある。

ただし、これはまさしく「落ちこぼれ」のなせる技なのだ。枝葉末節にひっかかってしまふと、本題からそれるのは必至。全体の輪郭、要約、テーマ、ポイント、まっとうな理解の核心からはずれてしまう。だから表面的に見れば、これは「理解の遅れ」ととられてもしかたない。当面の課題である全体の理解よりも、オマケのような部分にこだわっているのだから……。けれど、いいわけがたら、もう少しこのずれ方を見つめ「理解の遅れの本質」をとらえなおしてみよう。ここでずれるのは、おそらく視線の焦点だろう。「木を

見て森を忘れる」と狭視的な視線は批判されがちだが、ささいな部分がふと気にかかった瞬間に森は遠のき、一本の木が、その木肌が、さらには木肌の奥の、地下へとつながる樹液の管が視線を支配していく。私の名前には「森」がついているのに、さらに「下」がくっついているのがいけないのだろうか。どうしても森を鳥瞰する視線が持てずに、一本の木をつたって見えない地下へと、視線はミクロの旅にいざなわれていくらしい。この視線の当て方は、小さい子どもと似通ったところがあるのではないだろうか。『枕草子』の「うつくしきもの」の段をあげるまでもなく、小さい子どもは大人の目には入らないようなチリやアクタを、オモチャのようにつまみあげて弄ぶ。足元のブロック塀の穴から向こうを覗いてみたりする。広告のすみっこの絵を見逃さない。子どもの視線の低さと細かさは、全体を見下ろす大人の視線とは違う世界へと通じている。その場において、近付いてみて、飽くことなくこだわってみてはじめて見えてくる世界が、日常の視線の裏側にあるのかもしれない。表面的な理解の遅れは、小人のような細かい視線と歩幅を駆使することで、表面には現れにくい世界の本質へと通じているのかもしれない。

ここまで「ささいなこだわり」を自己弁護してきて、気づいたことがある。それは、ここに至るまで私の「こだわり」はいい形でほおっておかれた、ということである。研究の常套手段や形式やらを、かんじがらめに教え込まれていたら、私のような臆病な怠け者は、遅れたくないために表面的な理解をこしらえてしまうか、適当な知識をあさって形だけ整

# こだわりにこだわる

田中 三保子

えてしまうか、きっとそんな器用なことでもできないから、さっさとこの世界から足を洗っていたら。めんどうな「こだわり」に足をつっこんで、小人の目と足をもって、地下のミクロの旅をすることなどなかったら。適当な距離から面白がって見えてもらえたから、小人はいい気になって「こだわり」を歩いてこれたのではないか。そう考えると、教育されなかったわけではないけれど、それ以上に、私はいい形で「保育」されたのではないかと思う。「保育」の原義も知らないままいうのは不遜だけれど、その子が今持っているものを保ちながら、そこから育っていくのを助けるのが「保育」であるとする、私はいい年をしていい保育を受けたような気がする。そのおかげで、自分の視線や感覚を保ちつつ育んでいくような「こだわり」を、どこかでひっそりと楽しんでいられるのだ。

(聖学院大学講師)

日常の保育の中での子どもの「こだわり」について考えてみると、二つの側面があるように思う。それぞれについて実例をあげて考察してみたい。